

---

# THE CREATOR ~ 僕と創造主と英雄 ~

白木 告

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

THE CREATOR ～僕と創造主と英雄～

### 【Nコード】

N7362X

### 【作者名】

白木 告

### 【あらすじ】

魔法学校に通う14歳のリム。  
授業中ドラゴンが町に現れ、そこを間一髪で謎の男・ドルに助けられる。

ドルとその仲間の仕事は 神、と名義付けられたものと戦っていくことではない？

これが現実！？（前書き）

1話、2話、3話はほぼプロローグ扱いでお願いします  
ただ、読んだ方が面白く読めます

これが現実！？

「おい、リム！聞いてんのか？」

先生の言葉で我に返る。

ああ、まだ学校だったか、と気付き、やつちやった、と思う。

この国にいる15歳までの子供は、魔法学校に入ることを義務付けられている。

今、『魔法』というものが見直されているのだ。

この国では15歳になれば成人であり、この『世界』にある国のほとんどがそのような制度を取っていた。

リムもあと一年経てば成人であり、魔法学校で学ぶことも少なくなってきた。

なのに、だ。この有様である。

最近こういうことが多く、いきなり眠気に襲われ、気付くと寝てしまっていることが幾度もあった。

「すいません。聞いてませんでした」

なんというか、ふわふわしたような感覚が残っていた。

夢を見ていた、と思う。でも、もう何を『見た』のか、思い出すことすら出来なかった。

「お前なー。次やったら放課後残すぞ」

言われながらも、リムはもう話を聞いてはいなかった。

こんな魔法なんか学んだところで、自分には何もできない。

リムの成績は、学校の中では中堅どころで、いいとも悪いとも言えなかった。

俺にだってきつと何か出来ることは有る筈なのに……。いつも考えはそこに行きつく。

だからと言って、学校そのものは嫌いではなかったし、友達と話すのも楽しかった。

「この魔法の組成はこうなっていて……」

また先生が話し始めたとき、リムは窓の外に驚くべきものを見た。  
「ドラゴンだ……」

そのとき、ドラゴンが町の上空で雄叫びを上げる。  
その耳をつんざくような金切り声に、他の生徒もドラゴンに気付いた様だった。

「なんでこんな所にドラゴンがいるんだ！」

「ド、ドラゴンって……どうなってんだよ……」

クラスを大声が飛び交う。

そんなクラスを本来なら先生が収めるべきなのだろうが、先生も「落ち着け」とばかり言っている。

そんなとき、町全体に広報のようなもので放送が流れた。

「町の上空にドラゴンが確認されました。」

魔法壁を町の上空に張るので直ちに

パルテルスの収容施設に避難して下さい。

魔法壁は10分程度持つので慌てずに避難して下さい」

その放送が終わる頃にはクラスには誰もいなかった。

「やべっ。俺も急ごうっ」

リムも教室を出て駆けて行った。

リムが腕時計をチェックすると、

上空からまたあの金切り声がした。

恐る恐る空を見ると、案の定、ドラゴンはもう魔法壁を破つてきていた。

「おいおい、まだ5分も経ってねえぞ……早すぎだろ……」

リムも10分持つとは思っていなかったが、さすがに7、8分は持つだろうと思っていた。

逃げなきゃ、早く。リムは、パルテルスに逃げるのは得策ではない、そう思った。

魔法壁ですら5分持たなかったというのに、建造物である収容施設がドラゴンの攻撃を防ぎきれると考えるのは些か無理がある。

空を見上げれば、ドラゴンは口を目一杯に開けて火球を打ち出そうとしていた。

……これ、俺を狙ってね？

なぜかは分からないが、そう感じた。

ヤバイ。

火球が飛んでくる、その間に逃げ切るしかない。

リムは魔法で脚力を強化すると、火球を待った。

ドラゴンが業火をまとった火球を打ち出す。

その刹那、リムは猛ダッシュで走り出す。

打った後なら、方向を換える事は出来ない。できるだけ遠くへ逃げる。

火球が、何かにあたった音がした。

リムは、後ろを見て愕然とする。

収容施設は燃えていた。真っ赤に。

「みんなが……。あそこに、あそこにいるのに……」

リムは震えが止まらなかった。

振り返り、空のドラゴンを睨め付ける。

ドラゴンがギロリとリムを見る。

「……みるよ。殺してみろよ！」

セラム・セラミド！」

リムがそう叫んだその刹那、リムの後ろに魔法陣が現れ

そこから尖った岩石の様なものがドラゴンに殺到する。

だが、ドラゴンはそれを物ともせずリムに向かって滑空して来た。

かわす暇さえなかった。

早えーな、俺の人生。

リムがそう思い、ドラゴンがリムを喰らおうと口を開けたその刹那だった。

視界の中に何かが光った。

目の前には男が立っていた。その男は、凄まじい勢いで襲い掛か

るドラゴンを難なく刀一本で止めている。

腰が抜けてしまった。脆くもへなへなと地面に座り込む。

「間に合った、とは言い難いがまあセーフだろ。」

だが、ヘルハウンドにキマイラ、ガーゴイルにオーガときて終いにやドラゴンかよ。気でも狂ったか、あいつら」

口を挟むことも出来なかった。さらに男は続ける。

「腰が抜けるなんて、情けねえな……。この緊張じゃ、まあしょうがないか。」

おい、シーナ。こいつ安全な所まで連れて行ってやって」

すると、後ろから強い力で持ち上げられ、連れて行かれた。

肩を貸してくれている、この少女がシーナなのだろう。（まあリムよりは1つか2つ年上に見えるが）

そんなことを考えていると、首の後ろを強く打たれ、リムの意識は闇に落ちた。

男は刀でドラゴンを押し返す。

ドラゴンの剛力をものともせず。

「ドラゴンよお。わかってるだろ。お前じゃ俺には勝てない。」

諦めて主人の元に案内しな」

ニヤリと笑い、ドラゴンを睨み付ける。

案の定、ドラゴンは雄叫びを上げてブレスを吐き出す。

業火に包まれてなお、男は平然としている。ドラゴンの炎は摂氏千度もあるというのに。

「なんだ、終わりか？ならこっちからいくぞ！」

その言葉が言い終わるや否や、男はドラゴンに襲い掛かる。

男の剣は、白銀の軌跡を残してドラゴンの胸へと向かった。

ドラゴンの鱗は鋼鉄よりも硬い。硬度で負けている刀が鱗に通じるはずは無かった。

しかし。鮮血が散った。なんとドラゴンの鱗を切り裂いたのだ。

男は、ほうら、来いよ、と言わんばかりの余裕なのにも関わらず、凄まじい威圧感があつた。

ドラゴンは尚雄叫びを上げようとしたが、男の威圧感に負け、逃げるように飛んでいった。

「いい子だ。」

男はそう言つと、ドラゴンについて行つた。

ドラゴンが飛んでいった先には、黒いローブを被つた男がいた。その男は驚いた様に言う。

「貴様……ドル。何度我等の邪魔をする」

男……ドルが答える。

「何度でもさ。お前等は、一体何をしようとしてる？」

お前等の新しい魔法とやらも、どうにも胡散臭い」

黒いローブの男は鼻で笑い、応えた。

「お前か知り得る事ではない。だが、こう話している間も、紋章を持つ者は我等の手に落ちていく。

今に、知りたくなくても知ることになるさ」

訝しげに眉をひそめながらも、ドルは間髪いれずに訊ねる。

「それも……。どうも腑に落ちない。お前等だつて分かつてる筈だろ？」

今、俺とあいつはひとつだ。お前等が考えようも無いスペックだつて事が」

「分かっているさ。それでも尚、貴様を消せると考えてる、ということさ。

後残る駒は……。創造主クリエイター足りえる者のみ。もうこの町に用はない」すると男は空中に魔法陣を描き始めた。男の姿が消え始めたとき、ドルは言う。

「それと、お前等のボスに伝える。調子に乗り過ぎんじゃねえ。現実を見せてやるつてな」



それには応えずに、男は去って行った。独りになったドルは呟く。  
「クリエイター創造主足りえる者、ねえ……」

## これが現実！？（後書き）

はじめまして、白木告<sup>シラキツゲル</sup>です。この作品は、初めての投稿になります構成や、盛り上げ方が足りない、もっとリアルな方がいい、などの感想はどんどん言って下さると嬉しいです。至らない私ですが、どうかお付き合いをお願い致します。

幕開け、力を得るために（前書き）

やっと2話を投稿できました。

3話でリムの14歳は終わります。

どうぞお付き合いをよろしく願います

## 幕開け、力を得るために

「起きたか」

目の前には男が立っていた。

「お前、名前は？」

「リム。あんたの名前は？」

名前を訊ねられたので、相手にも訊ねた。

「俺はドル。宜しくな。」

手を差し出されたから思わず反射で握ってしまった。

学校で手を握るだけで、成立する契約もあると言われたから、少し渋い顔になってしまった。

それを見落とさず、ドルが言う。

「手握っただけで、契約が成立するってか？」

そんな狡いことしねーよ。めんどくせーし。」

リムはもうそんな事は聞いていなかった。すごい剣幕で、ドルに訊ねる。

「みんなは……町のみんなは、どうなったんだ？」

「死んだ、だろうな。だから最初に言っただろ。間に合った、とは言い難いって」

リムは齒の奥を強く噛み締めた。

「ドラゴン……なんで現れたんだ……。知ってるんだろ？教えてくれ」

「あれ？気付いてると思ったんだけどな。まあいい、教えてやるよ、お前にはちょっと酷かもしれないが、な」

リムは心の中で1つ、考えていることがあった。それは、このドルの言葉で、確信に変わった。

「俺が、狙われたのか？だとしたら、何で？何で俺なんだ？」

「知らんっ」

ドルはそうきっぱり言い切った。

「お前が狙われたのは間違いない。だけど、今回の件では、腑に落ちない事が多すぎる」

「そうか……。やっぱり俺が……。俺がみんなを殺したんだな」  
強くなりたい。俺に、今の俺に何ができるというのか。そう思うと、いてもたっても居られなくなった。

「俺に、いや、俺を、強くしてくれ。強くなりたい。力が欲しい。もうこんな思い、二度とごめんだ。」

あんたは、とんでもなく強いんだろ」

「まあ、別にいいが、弟子入りとなるとなあ。うーん。それを決めるのはお前だが、少し話しておこう。」

俺は、まあ厳密には俺たちは、何でも屋でもないが、そういうのをやってる。何でも屋つつても、規模は国や村単位、しかも、神がらみが多い。

お前、神って何かわかるか？」

リムは、学校で習った教科書どうりの答えを述べる。

「人智を超えた力を持った、魔力とかが桁違いの化けもんだろ？」

「まあ、7割正解ってとこかな。神は、それぞれ勢力や力があつて、弱いやつはホントに弱い。」

それに、人智を超えた力って言っても、神はそれぞれ1つしかそんなの持てない。

例えば、予知、空間回帰なんかがそうだ。それに重要なのが、神は、1つのエネルギー体のようなものだってことだ。自ら無限のエネルギーを作り出せるのは神だけが持つ力だな。

まあ、そんなモンと戦ったりするわけだ。お前は、音をあげないと約束出来るか？」

出来ないなら去れ。出来るなら、一緒に来い。お前は仲間だ」  
答えはもう決まっていた。

「俺に、そんな凄じいことが出来るかはわかんないけど、でも、もう決めたんだ。苦しんで、それでも戦う。戦って死ぬって」

リムがそう言うと、ドルは感傷に浸るように言った。

「死ぬことは無だ。どんなことを成したとしても、死んだら何にもならない。カッコ悪くても、どんな恥ずかしくても、生きる。目の前にあるものを、死ぬことで投げ出すのは、ただの逃げでしかない。俺の師が、俺に言ってくれた言葉だ。死ぬな、生きる。強くなり  
たいなら、生への執着を捨てない事だ。仲間を守って死ぬのは美徳  
じゃない。死ぬ事に、カッコイイもへったくれもありやしないんだ。  
お前の友は、お前が死ぬ事を願っているか？どんな形であれ、生  
きていることにこそ意味が有るんだ。」

綺麗事かもしれない。でも、死んだら終わりだ。生きる事を捨て  
んじゃねえ。判ったなら、付いてこい。お前に力をやる。生きるた  
めの力を」

気持がこもっていた。リムは、自らの愚かしさを噛みしめながら、  
付いて行った。

そこにはまるで修行場かのような場所が有った。四方に岩の様な  
ものが散乱していて、無駄に広い。

「お前、この岩に向かってお前の言う魔法ってやつを撃ってみろ」  
ドルはいきなり切り出した。リムは疑問を抱きつつも、すぐに応  
じる。

「セラム・セラミド」

岩が、魔法陣から現れて殺到する。

元々あった岩は、ほとんど削られることなく、そこに残っていた。  
「ふん。やつぱりか。お前のそれは、魔法とは言い難い。まあ魔法  
といえば魔法だが、本質をとらえていない。それは、転移魔法であ  
って、攻撃魔法じゃないんだ。」

攻撃魔法っていうのは、こういうのなんだよ」

ドルはそういうと、右手を岩の方にあげる。

轟音とともに、稲光が光る。岩が凄まじい音を上げて砕けた。

「すげえ威力だ……」

リムは驚嘆した。ドルはゆっくりと続けた。

「これをいきなり使うのには無理があるが、基本を教えてやる。こんな風に、この岩を切れ」

そう言つと、ドルはドルの右側にあつた岩を、いとも簡単に切つてみせる。

「それが、魔法の基本？なんで？」

「それも含めて、お前への課題だ。一日以内に切つて見せろ」

幕開け〜力を得るために（後書き）

この話の主人公は、ドルなんではないのかといつも自分で思いますが実際はリムです（笑）



## 戦士の資質（前書き）

ついに終わりました。短かったのに、めっちゃ長く感じました。次話には少し時間がかかると思います。いいものにしたいので。

## 戦士の資質

剣が岩に弾かれる大きな音がする。

「くそつ。全然切れねえじゃんかよ」

もうこうして100太刀近く切りつけているのに、まったく効いていないようだった。

リムは倒れ込み、空を仰ぐ。

「俺の魔法は魔法じゃなくて……。岩を切るのは魔法。何が魔法なんだ？」

「教えてあげようか？」

リムはすぐさま声のした方に向き直る。

「お前……シーナ？」

「あ、覚えててくれたんだ」

「一応、命の恩人の一人だからな」

「命の恩人……。いわれて悪い気はしないわね」

それを聞きながら、リムは話を戻す。

「さっきの……別にいいよ。こんぐらい、一人でやれる」

シーナは、ふふつと笑うと言った。

「あんたは、そのままじゃ絶対に魔法なんて使うことはできない。言われたでしょ。本質を理解しろって」

「本質って？」

「あれ？助言は要らないんじゃないの？まあ、いいけど。本質っていうのは、魔法を発動する基、とでもいうべきかな。それを理解しなきゃ、絶対に使えない」

リムは、少し考えたような表情になった後、顔を輝かせた。

「あんがとつ。わかったよ！俺は、剣で切ろうとしてたから駄目だったんだな！

切るのはあくまでも俺。俺と剣は一体で……」

シーナは驚嘆した。リムの言っていることは正鵠を射ていたから

だ。

リムには戦士の資質があるかもしれない。シーナはひそかにそう思った。

「あんたが言っていることは、確かに本質ではあるけど……それだけじゃない。」

もう一つ……もう一つ、本質はある。それは、うちのボスがやったことの中にヒントがある。

あんたなら、それだけでもう判るはずよ」

その頃……

「本当にあれで良かったのか？ あれは、魔力吸収石だろ」

セルはドルに問う。

「出来なきや諦めりゃいいだけの話だろ。それに……“あいつら”に狙われたんだ。」

アイツはやるよ」

「仮に発現したとして、生半可な力じゃ吸収されて終わりだ」  
セルはあくまでも悲観的だ。

「そうだな……。お前には話しておくか」  
話は長く続いた。

「俺がしなきゃいけないのはあれを切ること、それを具現化すること……」

そうかつ。ドルは、だから俺に切るところを見せたんだ。

見たことのあるもののしか、具現化できない！ それだ！」

リムは飛び上がった。ということは……見たことのある、ということを利用するのは間違いない。

すると、おのずと道は見えてきていた。

「切る為には……。それを具現化するという強い意思が必要。そうだ。間違いない」

リムは岩に向き直り、剣をかまえる。

ゆったりと落ち着き、切れるイメージを持つ。

自然と、剣にまで魔力が満ちていくのを感じながら、意識的に魔力を剣と腕の周辺に集める。

大きく息を吸い込むと、思いっきり剣を振る。

「斬るつつつつつつ!!」

轟音が修行場から響いて来て、ドルはセシルに笑いながら「な、言っただろ？」などと無責任なことを言いつつも修行場に向かった。そして、修行場の有様を見て目を見開く。

「粉々、か。切ったとは言い難いが、初めてで切れるとも思ってたかったしな。」

まあ、十分だろう」

内心の驚嘆を押し隠しつつもドルは言う。

明らかに魔力をしつかりと固めずに切ったのだとわかる。

だが、それなら普通は弾かれるのが、目の前にあるこの岩は粉々だ。

相当な魔力のキャティパシーである。こんなふうには粉々に意図して出来るのは、自分の仲間の中で6人居る中でも自分とセシルぐらいのものである。

「これで、俺を強くしてくれるのか？」

リムが問うてきたので、ドルは手で制しながら笑う。

「まあ、そう急くなって。お前は、まだ15いてないだろう。」

15になるまでは、俺が手ほどきしてやる。

15になったら、“何でも屋”で働け。それまで、俺たちのことを知ってほしい。

いいだろ？」

ドルは、そう言い終わるとリムを見た。

「そりゃそうだ。慣れないことを全力でやりやそうなる。」

しょうがない。寝床に連れてってやるか」

リムは倒れ込むようにして寝ていた。安心感と、疲れが来たのだ

ろう。

「お前がさっき言っていたこと、あれは、あながち間違いではないかもしれない」

セルはドルに言う。

ドルはそれには応えず、少し笑っただけだった。

## 戦士の資質（後書き）

次話からついに話は急展開していきます。

ひとつの話の中に最後への伏線をガンガン貼っていきたいと思います。

そこも見ながら読んでくれると幸いです。

## 初任務（前書き）

やっとですね。これから投稿に1週間ぐらいかかると思います。  
すみません。

## 初任務

「リム、お前の初任務が決まったぞ」

ドアが開き、ドルの声がする。

「やあ〜つときた〜」

この日から、運命の齒車は再び回りだす

「で、任務は？教えてくれよ」

「今回の件はいろいろと複雑だな。簡単に説明すると、スチューデ地方のオホワーって村に行け。

何か起きてるらしいから」

はあ〜？と思いつながら、リムは切り返す。

「そんな簡単でいいのかよ。何すりゃいいのか分かんないじゃん」

「それもお前が探すんだよ。……まあ、セナルが一緒だから、心配することはないだろ」

するりとかわされてしまった。

確かにセナルの実力はこの一年間の修行を通して知っていた。幾度か手合わせしたただけだが、それだけでも、実力の差を思い知らされた。

それに、ドルはあまり外には出さないが、セナルのことを一番信用しているように見える。

実力もあるが、それ以外にも何かあるように見えた。

「ある程度遠いぞ。気を付けてけよ」

ドルの言葉で現実に引き戻され、ああ、と頷く。

荷物は出来るだけ軽い方がいいということだったので、簡単に済ませてもう出発になった。

行くぞ、とセナルが言い、ああと応える。

ここから、波瀾万丈の初任務が始まった

「遠いのに、歩いて行くのな」



「今回の件は、急を要するわけじゃないからな」

セルルは簡潔に答え、さらに付け加える。

「それに、今回はお前の初任務だろう。一つ、ある程度有名な街に連れてつとけと言われている」

「なんで？」

「お前の生きてきた世界は狭い。出来るだけ大きな世界を見た方が、大局観を養える、だそうだ」

セルル自身もあまり納得はしていないのか、ドルに言われたであろうことをそのまま言う。

「まあ、途中にある街に寄るだけでいいな」

「俺としては、早く任務に就きたいしな」

ほう、とセルルは思う。そんなこともあって、アイツは、こんな面倒くさいことを言って来たのか。

その後は二人とも黙って歩いた。

「そろそろだな。見えてきたぞ。スチューデーの町、カステルだ」

リムは目を見張る。でかい。自分が生きてきた町の、比にもならない。

「ここで少し休んだら、オホワーに向かう。もう近いぞ」

ああ、と頷きながら、周りを見る。

「まず、飯を食おーぜ」

もう半日近くも食事を取ってなかったのだ。セルルも腹が減っていたのか、そうだな、と言うと、近くの店を指差しながら、あそこでしょう、と続けた。

その店は、バイキングのような形式で、リム、セルル共に大量に取ってきた。

それを食ったまでは良かったが、リムがおかわりを取りに行った後が最悪だった。

「お前、それは俺のだろ！」

リムの大声がする。

「お前こそ何言つてんだよ！俺が先に取っただろ！」

食事くらい、静かに取れないのか、そう思いながらも席を立った……その時だった。

背後に強力な魔力を感じる。咄嗟に振り返ると、“黒き翼”の一員の様だった。

おいおいまさかな……と思いつつもリムの方を見やると、やっぱり喧嘩してるのは“黒き翼”だった。

厄介なやつに喧嘩を売るなよ。

ホントにそう思ったが、止めるべきだろう。ふたりは、斬り合いまで始めているのだから。

「なんだよ、やんのか？」

相手が啖呵を切ってきたから乗ってやった。

「やってやるよ！」

言下に剣を抜いて一気に間合いを詰め、横殴りの剣を叩きつける。思い知ったか、そう思ったが、相手はしっかりと受けていた。さらにその衝撃を上手く使いながら死角である左手に回ってくる。

相手もここぞとばかりに強烈な一撃を放ってきた。

リムは後ろに飛びのきかわすと、隙を狙って剣を突こうと一気に寄った。

すると、いきなり剣が目の前に現れた。

あぶねっ、と一気に引いた。

「やめろ、リム。場を考えろ。それにお前が喧嘩したそいつはそこまででもないが、そいつの連れは、お前より全然強いぞ」  
「なにっ」

反応したのは、喧嘩相手の方だった。

「本当だろう。ここで話すのも面倒くさい。出るぞ、リム」  
セルはさっさと出て行ってしまう。

リムもついて行ったが、争っていた飯を食っていくのを忘れなか

つ  
た。

## 初任務（後書き）

いろいろわからないことあると思いますが、それは次話でおいおい説明していくとします。

## オホワー（前書き）

来ました。次話で神が現れるとこまで行きたいかなうなんて思っています。

オホワ―

「待てよ」

店から出たリムたちを、喧嘩相手が追いかけてきて声をかける。

「あんた……何者だ？」

「あんたとは、俺のことか？」

セシルが問うと、喧嘩相手は頷いた。

「人に名を問うときは、自分から名乗るべきだと思うが」

別に名乗っても良かったが、相手の名を知っておきたかった。

相手は少し躊躇ったが、決めたように言った。それだけ、セシルに驚いたのだろう。

「俺は……シガだ。ほら、名乗ったぞ。あんたも教えてくれよ」

「俺はセシルだ。名乗ったぞ。じゃあな、“黒き翼”のシガとやらセシルはさつさと歩いて行ってしまった。

傍から見ていたリムが慌ててセシルを追いかけていった。

「行ったか」

デュラスに問われ、シガはああ、と頷く。デュラスは気付いている部分があったのだろう、続けた。

「あいつらは恐らくドル一派だろうな。あのセシルという男には見覚えがある」

「あのセシルって奴、相当強かった。近距離で戦っている中を両方にあたらないように剣を突きだすなんて、生半可なことじゃない」

実際は、セシルが躊躇いもなく剣を突きだせたのには違う理由があるのだが、そんなことをシガが知るわけもなく。

「切り替える。任務の遂行に全力を尽くせば良い。聞きたいことは、隊長に聞けばよいだろう」

デュラスがそういうと、シガは頷いた。

そうだ。俺は“黒き翼”なんだ。

「なあセシル、黒き翼ってなんだ？」

セシルは問わねば教えてくれないと思ったのか、リムが訊いた。

「俺も良くは知らんが……。一般的な知識として、異能者の集団だと言われている」

「異能者ってなんだ？ごめん、よく知らなくて」

リムは少し悪そうに言う。

それに気づいているのかいないのか分からなかったが、セシルは答えた。

「異能者っていうのは、普通の人間にない力を持つてるやつのことを言う。」

異能者ということがわかったら、歳などに関係なく黒き翼に送られるらしい。

やつらの仕事の多くは、国家間の紛争の解決や、内戦の終結だと言われているが、実際のところは分かったもんじゃない」

「じゃあ、あいつも？」

「まあ、そうだろうな」

リムは驚いた。あいつ、なんかそんな凄いやつだったんだ、と。

次会ったら、決着付けてやる。

「見えてきたぞ。オホワーだ」

セシルが指差した方を見ると、確かに村が見えた。

長閑な雰囲気、田舎ってというのが一番似合ってる村だった。

「あそこで、何か起こってるんだな」

「そうらしいが……。傍から見ても、変化は見受けられないな」

確かにそうなのである。まさに普通の村であり、何かが起きているなどとは、俄かには信じられない。

「面倒くさいが、村の人に聞き込みをすることから始めるしかない

な」

ホントめんどくさい。

「じゃあちゃっちゃと片付けちゃおうぜ」

「すみません。この村でなにか異変みたいなものが起きたりしてませんか？」

「いや、そんなことは聞かないけどね」

毎回そんな返事が帰ってきて、リムは肩を落とす。

本当にこの村では何も起こっていないんじゃないのだろうか、そう思ってきていた。

「セシル、ホントにこの町でいいのか？」

「間違いはないはずだ。だが……そうだな。ドルに聞いてみるか」

セシルはそう言っていると、剣を振る。剣から溢れ出る魔力が形を成し、そこにドルが映る。

「ん？どうした？」

ドルの声が届く。凄い力だな、とやっぱり思う。一年前までの俺じゃ想像もできないことなんだから。

「オホワーに着いたまでは良かったんだが……。この町に異変と見て取れるものはないぞ」

ドルは眉を寄せながら言う。

「やっぱりか。確かに怪しい依頼ではあったんだがな」

「怪しいというのは如何いうことだ？」

「ポストに手紙が入っていたんだ。そこにオホワーで異変が起きてるって、助けてくれって書いてあった」

「セシル、危ないっ」

なんと、セシルを包丁を持った村人が襲っていたのだ。

リムは剣で包丁を弾く。セシルは振り返りその村人を押さえつけると昏倒させた。

二人で顔を見合わせる。やっぱりただの村じゃなかった。

「ありがとう、ドル。もう少しやってみるとする」



ドルは頷くと、消えた。

「その手紙の送り主を探せばいいんだろ？」

俄然面白くなってきたと、テンションが上がってきたリムが言う。  
セシルは頷き、続ける。

「この能力……。洗脳系の力だな。神の仕業か。しかも、村人全員の洗脳をしているとなると……」

「強いんだな？」

「まあ、ある程度は、な」

面白いじゃん。やる気がめっちゃ湧いてくる。

「よっしゃ、探そうぜ！」

さっきまでとは比べ物にならないテンションの高さで、リムが言う。

再び探し始めたが、手がかりになるような人は居ず、ただただ時間だけが過ぎて行った。

「セシル！あの外れにある家じゃねえの！？」

確かに、そこには家が建っていた。村の外れに。ポツンと。

## オホワー（後書き）

神ってすごいね。何でもできるし。  
でもこの話で言う神っていうのはすごい力持ってるだけで、何でもできるわけじゃないんだよね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7362x/>

---

THE CREATOR ~ 僕と創造主と英雄 ~

2011年11月17日21時09分発行